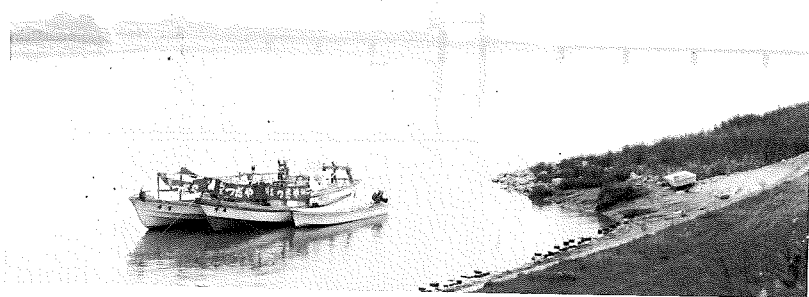


# 概 説



筑後川にかかる国鉄佐賀線昇降式可動橋

年

表

山田 與吉  
土師 勝次  
林 雅男  
松尾 景輔  
三船 俊郎  
中島 征帆  
大 麒麟

牟田 菊雄  
青木 二郎  
野田 三夫  
江口 辰五郎  
野田 普一郎  
松田 武彦

執筆者紹介  
あとがき

177

171

101

## 一 町の沿革と概要

諸富町は昭和三十年三月一日、旧東川副村と旧新北村が対等合併して、諸富町として発足した。町名の由来は『諸富町勢要覧』によると「地方公共団体としての健全な発展と町民諸々の福利増進を願ひ、また古くから筑後川河畔に諸富津があつて、水運の便に恵まれていたところから、商業地として、また歓楽地として、諸富の名声は遠隔の地まで知られ、愛称されてきたので、その由緒ある名を町名とした」とある。

本町は九州第一の大河、筑後川の河口部に位置する低平な沖積平野の中にある。現在は南の川副町を経て有明海に面しているが、いまから約五〇〇〇年前の縄文時代早期には、この平野では海拔五呎付近に海岸線があつたとみられ、本町は有明海の海底であつた。弥生時代になると海退や筑後川の土砂の堆積などによって海拔四呎線あたりには有明海の海岸線が移行し、本町付近は干潟が広がり、みぢ濡筋が発達していたとみられる。その後も土砂の堆積によって、年々自然陸化が進み、古墳時代のころになると、佐賀市から佐賀江湖を連ねる海拔三呎線に海岸線が南下してきたものと推定される。しかし城原川や巨勢川の三角洲が天津・諸富方面に砂州の形で微高地の島状をなしていたことが、昭和五十七年に発掘された権現堂遺跡などから推定される。古代の陸地化についての詳細は不明である。

寺井津は中国の秦の始皇帝の命により、不老不死の妙薬を求めて徐福が上陸したという伝説の地である。奈良時代、行基によって多聞院、安龍寺、神通院（現在廃寺）が建立されたといういい伝えも残されている。

平安時代の『和名抄』という本には、佐賀郡巨勢・蒲田の地名がみえ、本町に関する地名はみえないが、条里制の遺構がいくつか残されており、奈良時代後期には、かなりの人間が定住していたことが推定できる。

平安時代になると私有地開発による荘園が各地におこった。『長秋記』によると川副荘は最勝寺の荘園で年額二〇〇〇石の米を貢納したことがわかる。最勝寺は京都洛東の地にある名高い寺であった。太田荘は宣秋門院領から関白九条道家の領となった荘園で二五〇町あった。三重荘は当初七条院領に属したが、のち室町院領になり、二七五町の広大な荘園であった。

鎌倉時代になると筑後川沿岸の自然陸化にともなう耕地の拡大によって、天永年間（一一一〇～一一三）土師に右近氏が下向、その後大堂に諸富氏、福田に垣内氏、太田に太田氏、山領に村岡氏が定着し、地方武士として水利の権をにぎり、防衛のため濠をめぐらし、環濠集落をつくって居域とし自治を行った。

太田氏の入部は享祿二年（一五二九）に武蔵国江戸の太田資長（道灌）の五代の孫美濃守資元の下向にはじまる。資元は龍造寺家兼と結び、太田に田中城を築いて城下町を経営した。天文二年（一五三三）佐賀郡春日村の玉林寺竹翁和尚を請じ、慈広寺を開いて菩提寺とした。田中城は佐賀江湖を隔て相對する蓮池の小田氏に備えるためのもので、龍造寺勢力の東方進出の一つの出城ともなっていた。田中城跡はいまは水田と化しているが、地名に館・小路・構江口などがあり、慈広寺には同氏の墓地がある。太田氏は龍造寺氏に続く鍋島氏にも仕え、その部将として戦功を挙げ、後に鍋島姓を許され、大身として明治維新まで続いた。

村岡氏のもと探題今川氏に従って相模から下向し、天文二十二年（一五五三）村岡利真が、蓮池の小田政光攻めに加わり、その功によって山領、吉村、米納津の封土を与えられ、これにより山領に住し、のちその地名を姓とした。

『九州治乱記』や『歴代鎮西要略』によると、元龜元年（一五七〇）豊後の大友勢が侵入し、龍造寺氏の存亡をかけての戦いが本町を舞台に行われた。同年七月、大友宗麟は水軍をもって川副方面より上陸、佐賀に攻めいるべく兵船をもって攻撃してきた。その上陸地は端津（橋津）、浮盃津とあり、鍋島信昌（のちの直茂）や太田源舜らの働きによって、それらを撃退させた。

近世に入って、龍造寺の天下から鍋島氏に政権が移ると、本町の大部分は、本藩の直轄で蔵入地となった。しかし、大堂の内、小曲分と石井小路および加与丁の内、小田ヶ里分が三支藩の一つ蓮池藩に属していた。管轄は川副代官所と城内代官所の二つに委ねられた。川副代官所は川副・与賀両郷を支配するもので、三重に置かれていた。当町内では三重・為重・加与丁・太田・大津・大堂・徳富・大中島・諸富新村などがその管下であった。城内代官所は佐賀城内にあって、港津方の取り締まりを受けもち、津方代官とも呼ばれた。この管轄にあったのは橋津・諸富津・寺井津であった。

代官所のもとの村役は、庄屋、咄、吟味人、差使などで、名寄帳を整理、年貢の収納、郷倉の管理に当たった。津方の場合には庄屋の代わりに別当を置いた。ただし諸富津は津港である一方、田地耕作もあり、本年貢もあげられたので、別当、庄屋が置かれていた。諸富津は佐賀平野南部の商業津で、藩の上納米を納めた倉庫があり、大阪方面に売りさばかれて、御用商人の武富家などが生まれた。

本町の特色は早津江川の三重津に安政五年（一八五八）佐賀藩船手稽古所、のちの海軍伝習所を設けて、洋船運用術の教育を行い、訓練場もあった。この指揮をとったのが佐野常民であった。また文久元年（一八六一）には、同所に汽罐製造所が設けられ、精煉方技師田中近江・儀右衛門父子などが、蒸気機関や「凌風丸」という蒸気船まで製造し、日本海軍発祥地といわれた。

明治維新後、これらの設備は政府に献納され、習練の人員も工部省や海軍関係などに召し上げられたため、その後の発展を生まなかった。明治三十五年この場所に商船学校が創設されたが、昭和七年経済不況による財政難で廃校となった。

廃藩置県後、中央集権的な諸政策が次から次へととられたが、明治四年四月、戸籍法が公布され、戸籍事務を担当する戸長制ができ、大区小区制がとられた。

明治六年十一月の改正で、県内は四十一大区九十七小区に分けられた。本町関係（三小区は除く）は左のとおりである。

第七大区	大区		町 村 名	戸 数	人 口
	三小区	二小区			
	光法村、南里村、新郷村	寺井津、為重村	諸富津、徳富村、山領村、大堂村	九六四	一、〇八一
				六三二	五、七五〇
				九六四	三、三八〇
					五、二六七

明治八年三月十日には大区小区の改正で、第七大区が第一大区となり、小区は第五小区となった。当時の区劃

改正表による本町分は左のとおりである。

『第壹大区』 佐賀郡壹円

第五小区角町ニ扱所ヲ置キ左ノ拾箇村ノ事務ヲ扱フ

角 町 光法村 為重村 大堂村 新郷村  
江上村 徳富村 山領村 寺井津 諸富津

この十カ村が明治以後の地方行政の単位として出発したのである。その後、三潞県、長崎県など県域の変遷のたびに大区は変遷したが、第五小区の変更はなく、明治十一年七月、郡区町村編成法が制定され、町村は自治体の性格が付与された。

長崎県の郡区町村編成で、かつて四十二大区（諸富は五小区）に分かれていたのを一区二十郡に分割され、諸富地区は、佐賀郡長中山平四郎の管轄下に入った。

明治十一年調『郡村戸数人口並字調』から当時の人口などを付記する。

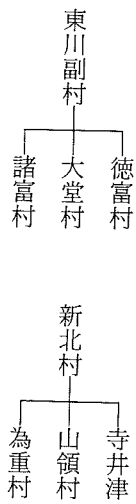
佐賀郡

為 重 村 戸数 貳百貳拾五戸 人口 千五十七人  
山 領 村 同 百七十八戸 同 九百二十二人  
大 堂 村 同 四百七十二戸 同 貳千貳百三十二人  
徳 富 村 同 三百三十八戸 同 千六百七十六人  
寺 井 津 同 五百五十三戸 同 貳千四百二人

諸富津 同 式百四十六戸 同 千四十二人

諸富の行政は、明治十二年三月制定の町村会規則によって、大堂村・徳富村・諸富津・寺井津・山領と為重を合わせて水町に五カ所の戸長役場を設け、公選された五人の戸長が村治の運用につめた。

明治二十二年四月、市町村制が施行され、現在の大字に当たる大村が、二、三ずつ合併して、今日の市町村の基礎ができた。本町関係合併は左表のとおりで、ここに新しい自治体の東川副村、新北村の誕生をみた。



なお、新村名は川副荘の荘名、旧藩時代の川副東郷、同上郷、同下郷の川副を東西南北中の五カ村に付し、新北村は新北神社にちなんで村名にしたものである。

本町は藩政時代以降、筑後川の水運をもつて貨物集散地としての位置を確保してきたが、明治に入って、筑後川の改修工事、機械灌漑の実施、大中島の耕地整理、産業組合の設立など着々と近代化を進めていった。特に明治三十一年佐賀セメント株式会社が設立され、当時、佐賀県最大の製造工場となった。工場がここに設けられたのは、原料の石灰石を熊本県芦北郡鶴木山、粘土を同県天草地方に依存し、有明海を通じての船便を得ていたためである。

明治三十七年、佐賀馬車鉄道株式会社が設立され、佐賀・諸富間を走り、筑後若津からは、関西方面を結ぶ船便もあった。昭和十年、佐賀市と福岡県瀬高町を結ぶ鉄道の佐賀線が開通すると、諸富は筑後・熊本方面へ海陸

合わせもつ交通の要衝として発展が期待された。しかし、大正末年佐賀セメント会社も閉鎖され、工場地が草競馬場になっていったが、昭和十八年工場跡地にアセトン・ブタノールなどを生産する軍需工場の大日本化学工業株式会社が出来、同十九年からは台湾・沖繩から砂糖を原料としてアルコールの生産をはじめた。同二十年八月には米軍の空襲を受け、工場は焼失し、終戦を迎えた。この会社は戦後工場を再建、社名を味の素株式会社と改め、テックス・アミノ酸などを生産した。

町村合併後の昭和三十年九月、国道二〇八号線に諸富・大川橋が架橋され、同三十六年、味の素工場は新工場を建設、同三十八年からは「味の素」を生産した。また同年、本町は「低開発地域工業開発地区」の指定を受けたため、対岸の大川市から木工企業の進出がはじまり、二〇数社の木工所が定着操業するに到った。

本町はもともと典型的な農村地帯で、これまで米麦を中心とする穀倉地帯として、高収量をあげていたが、大手工場の味の素や中小木工所の進出によって、農家の労働力は吸収され、農業の兼業化九〇%を占めるようになった。昭和四十六年都市計画法に基づく都市計画区域の線引を決定し、農業振興地域が指定され、大型機械導入を可能とする圃場整備が行われた。

漁業はもともと小規模な沿岸漁業として、有明海の刺し網漁が中心であったが、昭和二十六年、諸富漁協（當時は新北漁協）の数人の青年たちが、私財を投入して、佐賀県有明海海苔養殖の端緒を開いた。それ以後海苔養殖は急速に広がり、現在は海苔養殖中心の漁業になっている。

人口は大正九年第一回国勢調査以後表1のような推移をみせている。本町は戦後海外からの引揚者などを加え、増加の一途をたどったが、昭和三十年の総人口二万八五一人を第一次のピークとして漸次減少を続けた。これは

表1 世帯数及び人口の推移

区 分	世帯数	人 口			一 世 帯 当り人口	人口指数 大正9年=100
		総数	男	女		
大正9年	1,652	9,441	4,662	4,749	5.7	100.0
14年	1,738	9,447	4,531	4,916	5.4	100.1
昭和5年	1,646	9,287	4,563	4,724	5.6	98.4
10年	1,636	8,751	4,294	4,457	5.3	92.7
15年	1,633	8,832	4,290	4,542	5.4	93.5
20年	1,785	10,242	5,011	5,231	5.7	108.5
25年	1,952	10,728	5,154	5,574	5.5	113.6
30年	1,904	10,851	5,277	5,574	5.7	114.9
35年	1,964	10,417	4,966	5,451	5.3	110.3
40年	2,069	10,329	4,922	5,407	5.0	109.4
45年	2,358	10,803	5,085	5,718	4.6	114.4
50年	2,654	11,418	5,425	5,993	4.3	120.9
55年	3,024	12,239	5,855	6,384	4.0	129.6

資料：総理府統計局「国勢調査報告」

農業の停滞によって、大都市に人口が移動したことによる。本町の場合、佐賀県全体の減少率に比べ、ほとんど横ばい状態を保ち、昭和四十二年頃より再び上昇の傾向をみるにいたった。同五十年以後の急増は、佐賀市、大川市などのベッドタウンとしての住宅増や、工場誘致にともなう若年層の定着などによるものである。

昭和五十四年、諸富町政二十五周年を記念にして、近代的な町役場を建設、これにともなって、将来への総合開発計画を策定、自然と調和した魅力ある町づくりを目指している。

## 二 地理的環境

### (一) 位置・面積

諸富町は佐賀郡南東部に位置し、東は九州一の大河、筑後川を隔てて福岡県大川市に、西は佐賀市、南は川副町、北は佐賀江湖をはさんで佐賀市蓮池町に隣接している。東西約四・四キロ、南北四・二キロにおよぶ純農村地帯である。

本町の中心部をなす町役場の位置は、北緯三三度一三分一三秒、東経一三〇度二一分一六秒にあつて、国道二〇八号線を主幹道として福岡県大川市と佐賀市を結び、佐賀駅までの距離は約七キロである。またこの国道と平行して、国鉄の佐賀線が佐賀駅と鹿児島本線の瀬高駅を結んでいる。町の北部に県道神埼―諸富線、南部に国道四四四号線が走り、ここに生活道路の町道が交錯している。筑後川に面する諸富港は現在も水運の河口港として物資の輸送につかわれている。

位置・面積  
本町の総面積は一二・二〇平方キロで、佐賀県下の町村では、呼子町・三田川町・大町町に次いで四番目に小さな町村で、佐賀県総面積の約二〇〇分の一に当たる。総面積の地目内訳は表2のとおりで、田畑が全体の五五％を占め、文字どおり穀倉地帯であることがわかる。山林原野は皆無である。